

い。人間のやることだから、
らも仕方がない。問題は、
るのほうを、後の行政、
犯した間違いを、
にどう生かすかである。こ
この国では、「お上」は
常に「無謬」であること
になつてゐる。すなわち、
中央・地方政府の行為は、
それが間違いを犯し、市
民に及ぼす大きな損害
を及ぼさうとも、間違つ
たとは言わず、決して謝
らないといふことが不文
律になつてゐる。冒頭の、
え、必要予測が正しく
てその通りに経営がな
れるのは当然だが、こう
いう予測が間違つてい
て、甚大な被害が生じ
ることもある。成る。こ
ういふ場合、成功しても
失敗しても、成功しても
つた人々のすべてに行動
を明確に記録しておい
て、いつでも点検できる
ようになつておくことが
重要だ。成功したケース
は、その成功を大書して、
係者の名譽を永遠に讃え
る。ようすは、責任の所在
を含めてきちんとして、
メを押しつけておくのだ。
本県でも、行政の需要

想を重要な産業政策と位
置づけていた。好景気とバ
ル経済の区別がつかない
ままの計画は頓挫し、規
模を縮小する形でこの政
策を頭脳立地法に変更し
た。本県が当時提案して
いた全県テクノポリス構
想はなかなか認められな
かつたのだが、最終的に
「成功」を勝ち得て収束
し、利権者たちの輿望を
担つて米倉山開発が着手
されたのである。最新版の
この時期をバブル経済の
崩壊期と記録するはずで
ある。そうとも知らずに、
理解ある委員を動員し
て、成功間違いなしとい
う調子のいい計画を作成
し、そのまゝ実行してし
まつた。この失敗によつ
て県民が受けた経済的負
担は半端ではない。しか
し、これをしも行政は「無
謬」と言い続けている。
人は必ず間違いを犯す。
だ。だから、それをもち
て非難することはない。
ない。しかし、人間は
ときには、謙虚に総括す
ることが正しい人間的事
ことだ。先にリニアモーター
実験線誘致や県立博物館
館建設、今また、甲府駅
北口再開、計画は、目
建設等々、計画は、目
しだ。今度こそ、関係者
の足跡をきかないか。
して、後世へは、事
よ、後世へは、事